コトワザあらかると

2017 年 11 月 1 日

日本ことわざ文化学会

『コトワザあらかると』刊行によせて

日本ことわざ文化学会会長　時田 昌瑞

本学会が設立されて９年目を迎えている。本会の活動は、月一度の月例会、年に一度の大会、ホームページの運営などを軸に展開されてきた。月例会は本年９月時点で 81 回に及んでいる。取り上げられたテーマも森羅万象をあらわすとされることわざに相応しく、実に種々様々なものが取り上げられてきた。また、年に１度の開催だが、分科会に相当する西日本分科会も４回行われてきた。その他、広報活動として「シリーズことわざに聞く」の出版も５冊の刊行をみたが、残念ながら 2014 年度をもって中断となった。

出版活動が停止となってからは会員の意見を交わす場や研究活動を保障する場としての学会誌が必要との声が上がってくるようになった。いわば会員からのニーズに応える具体的な場の一つが本誌となったという次第だ。ただし、本誌は学会誌ではなく同人誌だ。

本学会は、ことわざを学問と位置づけ研究対象とする者だけでなく、庶民のことわざとしてそれを味わい楽しむ者がいっしょに歩む会だ。研究活動の報告などは電子版による学会誌で扱う一方で、同人誌は会員ひとりひとりのさまざまな声を反映する気軽で楽しい読み物としての役割がある。

さして面白味のない話はこれくらいにして、表紙の図柄について触れることにする。表紙はその歳の干支に関わることわざ図像を用いることにしている。創刊号を飾る図柄は中国の故事に由来する「諫鼓苔深くして鳥驚かず」で、平安な世の中の譬え。人民から諫言を聞こうとした王様がお城の門外に太鼓を置き、不満のある人に太鼓をたたいてもらおうとした。ところが、だれも太鼓を打つ者がなかったので太鼓には苔が生え、その上で鶏が鳴いているというもの。表紙の図は色紙に描かれた一点。

図像化されたことわざや故事は数千項目に及ぶが、ここのものは広範なジャンルで用いられている一つだ。絵画などの絵本から、大きなものでは高さ５ｍほどの祭りの山車①、織物では長さ４ｍを超す幟②、塗りものでは漆塗りの硯③、印籠④、焼き物では置物⑤や香合⑥などに見られる。その他に板戸絵、絵皿、香炉、香道具箱、袱紗にもみられる。お目出度い意味合いがあるためだろうが慶事での引き出物でも使われる。それもあってか高価で豪華な作品が多いのもここの特長なのだ。

①祭りの山車

②幟

③漆塗の硯

④印籠

⑤置物

⑥香合

コトワザあらかると

目　　次

巻頭言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 時田 昌瑞（02）
目　次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ （03）

第１部　ことわざエッセイ

第１章　ことわざの「こと」を物語の「もの」へ昇華させる
　　－NPO ことネットの事業－・・・・・・・・・ 穴田 義孝（07）
第２章　酒飲みことわざ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 古後 靖弘（09）
第３章　留学生とお酒・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 佐古 恵里香（13）

第４章　俚諺が生きるムラに密着を続けて　西川 桂史（15）
　　―群馬県利根郡川場村門前、「春駒をやって一人前」―
第５章　衣食足らずとも・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 蓮見 順子（19）
第６章　髑髏の思惑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 福井 栄一（23）

第２部　ことわざコラム

第１章　教室でことわざを創作するためのテンプレート・シート
　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 浅賀 宏昭（27）
第２章　鬼の目にも涙のこと・・・・・・・・・・・・・・・ 蟻川　剛（28）
第３章　孫は来て嬉しい、帰って嬉しい。・・・・・・・・ 石原 仁誌（29）
第４章　目からうろこ　コンタクト・・・・・・・・・・・・ 大田 朋子（30）
第５章　「７年越しの昔の恋人」「備えあれば憂いなし」
　　－東京マラソン参戦記―・・・・・・・・・・・・・・ 清水 泰生（31）
第６章　祖母にもらった福・・・・・・・・・・・・・・・・ 藤村 美織（32）
第７章　一寸先は闇・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 三木 恒治（33）
第８章　座右の銘・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 芳川 雅美（35）

第１部　ことわざエッセイ

第１章　ことわざの「こと」を物語の「もの」へ昇華させる

－NPO ことネットの事業－

穴田 義孝

英文学者荒木博之は「ことの世界」朝日新聞社編 1980『日本語から日本人を考える』において、「＜物語＞の『もの』にはモチーフ（題材・思想）があり、そのモチーフには原理性・法則性が含まれる。故に『ものがたり』は研究の対象になるが、＜ことわざ＞の『こと』は内容において森羅万象を網羅してはいるが、一句一句には必ずしもモチーフ・原理性がない、さらに使用法においては法則性がない、故に研究の対象にはならない」としています。

この説には当初は真っ向から批判しました。例えば「怠け者の節句働き」一句だけで社会や文化の原理や法則性を導き出すデータとなり得ると反論したものでした。類句としての「横着者の節句働き」「極道の節句働き」「怠け者の宵働き」「野良の節句働き」「無精者の一時働き」などのバリエーションは、広い範囲で「普段は勤勉に働き、冠婚葬祭などの節日（ハレの日）には思い切って休息をとる、ないしは神仏の前では無礼講で飲食する」という“勤勉と休息のけじめをつける”とする日本人の社会的行動原理（社会的性格）が通用していたことを推測させます。

ところが、＜郷土（地方・故郷）のことわざ＞を探究していくと、各地の『郷土史〈誌〉』類のことわざの記録の仕方が、例えば長野県編纂 1987『長野県史　民俗編第一巻（三）東信地方　ことばと伝承』社団法人長野県史刊行会のようなものが大部分でした。「苗代半作（別所、東田沢）案じるより生むがやすし（耳取、十二新田）石の上にも三年（平林、親沢）腹八分目（西宮、高野町）一事が万事（真田）火事とへは騒ぎ出した所が本元だ（真田）強情っぱりの徳とらず（真田）かぼちゃは冬至に食べじまい、年をとらせるな（小井田）餅はこじきにつかせろ、魚は大名に焼かせろ（小井田）―後略―」。このように句の羅列と民俗学の手法に従って蒐集された地域が（　　）内に記入されているのみで、解説・説明、用例さえありません。これでは確かに「一句一句には必ずしもモチーフ・原理性が見出せないばかりか、縦横無尽な使用法においても法則性がない」と言わざるを得ません。記録はされるが当該地域の人々にも記憶はされないし、故郷の生活様式や生活の知恵などが次世代の若者に伝承され、了解、共有、時に共感・感動されることはほとんど期待できません。まして他所の地域の人々には了解、共有、特に共感・感動はされません。＜郷土のことわざ＞は消滅を待つばかりとは言い過ぎでしょうか。

ところが、例えば「宵の風は母の風」猪野々老人クラブ　女性（80 歳）福知山市老人クラブ連合会編 1990『語りつぐ福知山老人の知恵』竹原一雄のような事例を見出しました。「冬になると田舎では、法事や報恩講などいろいろの行事がありました。今のように料理屋にたのむこともなく、全部を家で作りました。昭和のはじめ頃、主婦にとっては大仕事でした。こんにゃくを作るやら、冷たい大根を刻むやら、夜の更けるのも忘れて明日の用意をしたものです。そのような時、いつも姑が言っていた『宵の風は母の風』という言葉を思い出します。すべてが変化したこの世代に不似合いな言葉かとも思いますが、働くの

が美徳だった明治の生れの私には、よい教訓として励ましてくれた言葉です」。

ことわざにエピソードや解説などが付記されて、ことわざは単なる「こと」から「ものがたり」の中に組み込まれて「もの」に昇華し、コンセプトが文章中に内包されます。こうなれば了解、共有、時に共感・感動され、さらに次世代に伝承されていくのではないでしょうか。NPO ことネットでは、生き生きとしたことわざの記録としての「小さな地域のことわざ風土記（民俗誌）」を地域の皆様自らで作成していただくアシストを進めております。

第２章　酒飲みことわざ

古後 靖弘

ことわざは、古くから言い伝えられてきた言葉で、人々の知恵から生まれた教訓や風刺を含んだ簡潔な言葉が多い。人生の真理、仕事の知恵、男女の機微、言い訳をする時、励ます時、戒める時にもよく使います。健康保持の知恵に役立つもの、そして笑いを誘う言葉も多い。ことわざは、日常生活を円滑にする慣用言語芸術と言う人もおられます。

「**酒は百薬の長**」と言うことわざは誰でも知っています。中国の『漢書』（食貨志）に出てくる古い言葉で、日本でも南北朝時代の『曽我物語』あたりから用いられているようです。適量であれば血行を促進して、精神的な寛ぎを与えてくれると言う教訓です。私はこれを実践して「**羽化登仙**」、羽をつけて天にも上る気分で、５０年以上酒を飲んできたので、相当な量になると思っています。

日本酒が一番おいしいと思っています。銘柄や甘口か辛口か等のこだわりはありません。サラリーマン時代に３０年近く住んだ大阪府河内長野市は、中世の歴史が残る街でした。空海と関係が深い観心寺や天野山金剛寺は全国的に有名です。この金剛寺で造られていた僧坊酒は記録に残る名酒です。室町時代には公家や武士、僧侶に評判が高かったようです。今でもお寺には豊臣秀吉が名酒とたたえた朱印状が残っています。昭和になって地元の酒造会社が「天野酒」と言う銘柄で造っていますが、焼酎ブームで売り上げが伸びないのが悩みだとか聞いています。酒を材料にした美肌クリームが開発されているように、美肌健康にも役立つはずですが如何でしょうか。

昔から九州の焼酎は、鹿児島、熊本、長崎産等が有名でした。若い頃に年配の方から勧められて飲んだ安い焼酎の匂いが強烈だったので、今でも美味しくないものと思い込んでおり、あまり飲む機会がありません。最近は製造方法が向上して、原料も芋、米、麦等多岐にわたり、香もよく味もまろやかになって、日本酒派よりも焼酎派の方が多いのではないかと思います。お湯割り、水割り、オンザロックと色々です。一度血糖値が高いと医者に言われて、晩酌をウイスキーに変えたこともありますが長続きしませんでした。焼酎を飲んでいれば血液をサラサラに維持できるが、肝臓はボロボロだと言う笑い話があります。焼酎は蒸留されていますから二日酔いにならないと聞いたことがあります。でも自分の適量を踏み外したら二日酔いになるに違いありません。「**人　酒を飲む、酒　酒を飲む、酒　人を飲む**」と言うわけです。７０歳台後半になって今更健康に良い酒は何か、と言うわけでもありませんが、最近地元の合唱団仲間の４，５人と練習帰りに、馴染みの居酒屋で飲んでいましたら、思い出したようにワインを注文した人がいて健康談義となりました。ワインがポリフエノールを沢山含んでいるから体に良いと言うわけですが、心優しいおかみさんから、「ちょっと遅すぎよ」とからかわれて大爆笑しました。嗜好品だから、人それぞれ好みに合わせて、日本酒、焼酎、ビール、ウイスキー、ワイン等好きなように適量を楽しく飲めば良いと思います。それこそ「**酒は天の美禄**」なのです。

現在我が家での晩酌は、「**酒は燗、魚は刺身、酌は髢**」というように、冷酒より常温かひと肌の燗にしています。魚にあまり文句は言えませんが、鯵のたたき、タコの酢味噌和え、煮干し、冷奴、大根おろしにチリメンジャコをまぶすのが好きです。当然のことですが、

酌は髱（美人）ではなく古女房で我慢しています。正月には年ごろを迎えた孫娘の酌で飲むことがあります。酒量の方は、「**酒は三献に限る**」と言うように一合程度、猪口三杯にしています。しかも一週間に一日は休肝日をもうける律義な健康生活を送っています。その理由は会社を退職して６０歳台後半に体を壊したからです。以来早期発見、早期治療で乗り越えてきましたが、長年の飲み過ぎのツケが回ってきたに違いないと自己分析をしたわけです。「**酒は命を削る鉋**」とはよく言ったものだと反省しています。

敗戦直後の父は、子供の前であまり酒を口にしなかったと思います。飲みたくても酒が手に入らなかったに違いありません。晩年は「**酒と産には懲りた者がいない**」と言うように酒を飲み過ぎた時の辛さや、母の出産の時の心配や辛さを忘れて、酒と子供達の成長に楽しみを見つけていたように思います。「**酒なくて何の己が桜かな**」気取りで花見は大好きだったようで、酔っぱらって家に帰り着くと文字通り「**酒は止めても酔いざめの水は止められぬ**」という姿を繰り返し見せて、母親に心配をかけていたと思います。このように、酒好きであれば時に飲み過ぎを経験することがよくあります。しかし日常的に飲み過ぎると「**酒は諸悪の元**」「**酒は百毒の長**」と言うように、百薬が百毒に変わるわけで健康を害したり、思わぬ事故を起こす原因を作ったりすることにもなります。酒にはいろいろな危険が潜んでいるから、「**上戸は毒を知らず　下戸は薬を知らず**」を肝に銘じておくことが大事です。飲み方上手に楽しむのが一番と言う事でしょう。「**朝酒は門田を売っても飲め**」はもっての外ですし、「**とかくこの世は色と酒**」等と言っていると家族会議を開く基になります。

独身時代の昭和４２年頃、転勤で山口市に住んだことがあります。多くの良友に巡りあって、酒好き同士でよく飲んだものです。「**酒飲み、本心違わず**」、酒を飲んでもお互いの生来の性質は変わらない安心感があったのは、よほど馬が合う人に恵まれたからでしょう。山口は、小京都とも言われ、昔大内文化が栄えたところで、芸事が盛な所でした。謡曲には流派がいろいろあるわけですが、私は、喜多流の先生との出会いがあって、その良友達と謡曲を習ったことがあります。今、手許に月宮殿、船弁慶、鞍馬天狗、竹生島、紅葉狩等の謡曲本が２０冊程残っています。広島の厳島神社桃花祭御神事が３日間執り行われた時に、この喜多流の師匠の弟子として舞台に上がったことがあります。そのプログラムを今振り返ってみると、なぜそんな舞台に立てたのかよく思い出せません。師匠の子供さんが牛若丸役で、師匠が弁慶、我々弟子達は地謡役でした。出演料を払われ、芸事の世界を垣間見た思い出があります。ある時、師匠が謡の練習帰りに我々が酒を飲むことを知って、いずれめでたい結婚式に出席する機会も出てくるだろうから、その時のために役立つ祝言小謡集の『海老』を教えてくれました。「海老の子は、親に似て、幼少よりも髭長く、腰に梓の弓を張り、目こそとび出で、めでたけれ」と言う御目出度い謡です。この謡は、後々職場で芸は身を助けると言う事で役立ったわけですが、カラオケなどない時代でしたが、少々古臭いね、と同僚からからかわれました。当時はまだ若く「**下手な大工でのみ一丁**」とか言う駄洒落は知りませんでした。強がりの「ことわざ」は知らなかったわけです。「**新しい酒は新しい革袋に盛れ**」とか言って政治、経済、芸術文化等青臭い若気の議論をしたものです。今は「**酒は古酒、女は年増**」、年輪を重ねた夫婦が静かに飲み交わすことを大事にしています。

会社勤めをしていた頃の酒飲みにまつわる思い出はいろいろありますが、会社帰りに僚友と北海道から九州までの地酒を揃えている大阪梅田界隈の居酒屋で時々飲んでいました。最近は日本各地で造られるワインが増えているそうで、地酒ならぬ地ワインをそろえた洒

落たお店があると聞きますが、当時全国の日本酒をあれだけ揃える店は貴重だったと思います。「**御神酒あがらぬ神はない**」と若さの勢いで「**友と酒は古いほどいい**」とか言いながら、北から南へとその土地の地酒を選んで順番に飲んでいくと言う豪気な酒飲みをやりました。「**酒は憂いの玉箒**」の通り、箒で職場のストレスをはきだしたわけですが、「**酒は忘憂の物**」という憂いを忘れさせる一面もありました。一方で「**酒に十の得あり**」と言う通り、酒は、お互いが本心を通わせる事が出来るサラリーマンの息抜きには欠かせないものでもあったことは、間違いありません。この豪気な話も、東北地区の銘柄で二人とも酔いが回り、「**酒は飲むとも飲まれるな**」を守って飲み止めましたが、翌日の二日酔いに繋がったことは言うまでもありません。「**冷酒と親の意見は後で効く**」を文字通り経験したのです。その頃職場には、酒がめっぽう強く、酒やビールについての知識が豊富な上司がいました。酒の銘柄は辛口で〇〇、ビールは〇〇ビール、一口飲んだらすぐ見分けがつく、と言うのです。そこである時、別の銘柄の酒とビールを上司に飲ませたところ美味い美味いと飲み始めたので、上司は、すっかり信用をなくしてしまいました。「弘法筆を選ばず」と言いますが「酒豪銘柄を選べず」だったのでしょう。

酒飲みの経験者は、酒を楽しく飲むための講釈をしたくなるものですが、「**手酌貧乏**」つまり独り酒は避けた方がいいと思います。一人で飲んでいますと飲み過ぎて悪酔いすることが多いからです。ただ飲む相手がある時、「**酒は本心を現す**」と言うように普段はおとなしい人が突然怒り出すこともあるから酒付き合いは難しいのです。笑い上戸や泣き上戸などの人もいますが、これはご愛嬌です。こんな人が、翌朝、昨日のことなどすっかり忘れて真面目な会話をするから不思議です。酒の酔いが回ると抱きついてきて、やたら人の顔を舐めまわす人がいて困ったことがあります。勿論抱きつく相手は男性ですが、翌日職場で舌が痛いと言うから、さぞ髭面をなめすぎたにちがいありません。やはり酒には魔物が潜んでいる証拠です。恩をあだで返す時の言葉に「**酒買って尻切られる**」とありますが、相手が酔って暴れて尻を蹴ったり、暴れる人もいますから、こんな人とは飲まぬにこしたことはありません。しかし、なりゆきで避けることが出来ないことも有りますので、さわらぬ神に祟りなし、髭面をなめまわす癖の人と同様、酒席では、酒癖の悪い人の横に座らぬタイミングが大事になります。

酒が飲めない体質にはアセトアルデヒド分泌が関係すると言う医学的根拠があるそうですが、屈強なスポーツマンが一滴も飲めず、小柄な体格で運動嫌いな人でも底なしに飲む人もいます。「**酒に別腸あり**」つまり人間の体質で酒専用の特別の腸があると言う事でしょう。これは食事の後に甘いケーキを沢山食べる人の別腹と似ていると思っています。大酒飲みの親父を反面教師として育ち、一切アルコールに手をつけないと言う律義な人も知っていますが、「**酒極まって乱となる**」、こんな場面を何度も目のあたりにして育ち、あんな男にはなりたくないと酒嫌いになったのでしょう。酒好きの人間として、そんな経験で酒嫌いになるのは可哀想な気持ちになって同情してしまいます。

福島民謡の会津磐梯山の歌詞の中に、小原庄助さんが、朝寝、朝酒、朝湯が大好きでそれで身上を潰したとあります。酒飲みなら一度はやってみたいとは思いますが如何でしょうか。最近は質屋など街にあまり見かけませんが、昔は「**女房は質においても朝酒は止められぬ**」という酒好きがいたようです。しかし酒に溺れては「**酒と朝寝は貧乏の近道**」と言う事になりかねないわけで、「**上戸めでたや丸裸**」、財産を飲み尽くすようなことになっては元も子もなくなります。「**酒外れはせぬもの**」、で酒が飲めなくても酒好きの人と付き

合っていると仲間外れにならないですむと言うこともありますが、「**下戸は上戸の被官**」にならないように、酒の飲めない人に上戸の人が面倒を見てもらうようなことは、酒飲みとしては慎みたいものです。地下鉄のプラットホームで下戸の人から介抱されている姿は見苦しいものです。

酒飲みの日常について、昔作家の藤本義一さんの語った話が思い出されます。「昼の酒は残酷、黄昏時の酒は郷愁、夜中の酒は陶酔、夜明けの酒は恍惚、朝の迎え酒は邪道」、下戸の方には理解できないでしょう。

酒飲みにまつわることわざは、まだまだ沢山あると思いますが、ことわざには両義性があると言われます。酒の「百薬」が「百毒」になるのがその例でしよう。「急がば回れ」に対しては「善は急げ」、「石橋をたたいて渡れ」に対しては「当たって砕けろ」、等含蓄のあることわざは多いのです。「出る杭は打たれる」ということわざに対して、「出ない杭は腐る」ではないかと言う人もいます。テレビドラマの「渡る世間は鬼ばかり」は有名になりましたが、「渡る世間に鬼はなし」と言う古くからのことわざから生まれた新しいことわざでしょう。現代の複雑な社会を反映していることわざとして定着しているのかもしれません。

ことわざは、先知恵と後知恵の宝庫と言われています。何れ酒飲みにまつわる新しい「ことわざ」を創ってみたいと思っています。

参考図書：柚木　学『酒造りの歴史』雄山閣 2005
時田昌端『岩波ことわざ辞典』岩波書店 2000
学研辞典編集部『用例でわかる・ことわざ辞典』学研教育出版 2015

（了）

第３章　留学生とお酒

佐古 恵里香

「酒は百薬の長」という中国から来たことわざがある。日本人にもなじみが深い。こんなことわざがあるぐらいだから、中国からきた留学生はお酒が好きだろうと思う日本人もいるだろう。しかし、中国の若い男性や女性の中には人前でお酒を飲むことを好まない人も多い。

ある中国人の友人が日本人の男性と国際結婚をしようとしている。しかし、彼女は夫となる人のお酒の飲み方がどうしても好きになれない。日本の独身の男性なら、付き合いで仕事終わりにお酒を飲みに行くのは普通だろう。昔はどうかわからないが、2017 年現在では、日本で女性がお酒を飲むことにたいして咎める人はいないだろう。私が友人とお酒を飲みに行って酔っぱらって帰宅しても、家族は「楽しかったのね」という感想を持つぐらいだろう。友人自身も日本に来てから、仕事の帰りにお酒を飲むようになったと話している。しかし、どうしても夫となる人の生活態度、特に酔っぱらって帰宅することが許せなく、婚約を解消しようかと本気で悩んでいた。お酒による文化摩擦が生じている。

「酒は諸悪の基」で、教養のある人はお酒を公共の場では飲まない。中国だけでなく、欧米から来る教養の高い留学生もお酒にシビアだ。真面目だというイメージを持って日本へ来日すると、お酒への寛容さに驚くようだ。実際、お酒を飲むことに対するモラルについて調査を行ったピューリサーチ社のデータによれば、日本は他の国を大きく引き離して、お酒に対して寛容であると答えた人の割合が高い。中国は、日本に比べると寛容できないと答える人の割合が高い。

まさか、お酒の飲み方が結婚に影響するとは考えたこともなかった私はとても驚いた。お酒を飲んで、電車で泥酔しても財布を盗まれないような平和な日本に暮らしているからかもしれない。飲みにケーション。お酒を用いて場を和ませようという文化だ。彼女たちの文化摩擦の解消を祈るばかりである。

【参考文献】

Pew Research Center Global Attitudes & Trends (2014)　“Global views on Morality” http://www.pewglobal.org/2014/04/15/global-morality/table/alcohol-use/ 2017 年 8 月 9 日アクセス

Pew Research Center

Global Attitudes & Trends

Alcohol Use

Do you personally believe that **drinking alcohol** is morally acceptable, morally unacceptable, or is it not a moral issue?

UNACCEPTABLE
ACCEPTABLE
NOT A MORAL ISSUE

R	COUNTRY	U% ▼	A%	N%
	Pakistan	94%	1%	2%
	Palestinian ter.	89%	1%	9%
	Jordan	85%	3%	12%
	Indonesia	85%	2%	8%
	Tunisia	85%	5%	6%
	El Salvador	82%	8%	8%
	Ghana	80%	8%	8%
	Egypt	75%	5%	13%
	Malaysia	70%	10%	15%
	Bolivia	69%	13%	12%
	Turkey	69%	10%	17%
	Nigeria	68%	6%	17%
	India	66%	10%	16%
	Senegal	63%	9%	24%
	Kenya	59%	9%	24%
	Uganda	57%	19%	14%
	Lebanon	51%	25%	21%
	Brazil	47%	29%	20%
	Russia	44%	26%	13%
	Argentina	42%	26%	27%
	Mexico	41%	21%	31%
	China	41%	12%	37%
	Venezuela	39%	36%	17%
	Philippines	39%	34%	24%
	South Africa	36%	22%	25%
	Chile	31%	29%	31%
	Israel	29%	27%	39%
	Italy	27%	15%	49%
	Greece	23%	22%	47%
	Spain	22%	27%	46%
	South Korea	22%	34%	35%
	Czech Republic	22%	46%	24%
	France	18%	25%	56%
	Poland	17%	37%	34%
	United States	16%	32%	46%
	Germany	14%	41%	40%
	Australia	10%	36%	46%
	Canada	9%	31%	57%
	Britain	9%	38%	47%
	Japan	6%	66%	25%

第４章　俚諺が生きるムラに密着を続けて

―群馬県利根郡川場村門前、「春駒をやって一人前」―

西川 桂史

１・はじめに

私は民俗学を専攻している関係上、俚諺と称される種類のことわざに関心を抱いています。本学会では、群馬県利根郡川場村門前に伝わる俚諺、「(ムラの男は)春駒をやって一人前」を事例にして、ことわざの要件とされる構造性および伝承性について発表させていただいたことがあります。主要な論点は、ことわざが比較的短命なサイクルで再構築されていること、構造性をもつということは地域固有のことわざは存在しないのではないかという疑問、でした。その詳しい議論は、追って刊行される本学会学術雑誌に投稿させて頂く予定です。ここでは、本誌の主旨にあわせ、川場村での具体的な体験談をもとに、この俚諺が意味するものについて考えてみたいと思います。

２・春駒をやるということ

春駒についての詳しい説明は、文字数の関係から割愛させて頂きます。詳細は文末の参考文献を御覧ください。以下、重要な点だけ触れておきます。川場村は群馬県北部に位置し、武尊山を臨む農村です。その川場村門前地区では、2 月 11 日(かつては二月初午)に春駒という年中行事が行われています。男性が女装をして、地区内の家を一軒一軒訪問し、歌と踊りをもって、五穀豊穣・家内安全などを願う行事です。門前に生まれた男性は春駒を演じるという伝統が、大正初期には構築されていたようです。

寒空の下、家々をまわる男性(筆者撮影)

現在は、門前地区在住の男性と条件が緩和されましたが、かつては家督継承権をもつ人物にしか演じることができなかったといいます。春駒は、もともと養蚕の大成功を祈願する行事だとされていますが、川場村で今も養蚕を営んでいる家は一軒もありません。それでも春駒は続けられています。筆者は、その点に注目し、春駒が村落構造の中で担っている機能について明らかにしました。

本論と関係があるのは、春駒が成員を結び付ける紐帯として働いており、同時に成員認証の機能をも担っているということです。成員認証とは、共同体に属するものが一人前と認められるための(多くは労苦や冒険を伴う)試練と捉えて頂ければ結構です。有名なところであれば、バンジー・ジャンプの基となったものなどがそれにあたります。

従って、春駒はある種の通過儀礼の意味合いをもちます。同世代、あるいは先輩達と辛く厳しい練習をともにし、寒さと酒気と格闘しながら一日中春駒をやってまわる。この体験の共有が紐帯として門前の人々を結びつけているのです。そして、同世代の人間と頑張

って春駒をやっている姿をみた地区民から、立派になったと認められることになります。ですから、門前(ムラ)に於いては「春駒をやって一人前」となるのです。

先輩から後輩への指導（筆者撮影）

本番が無事に終わり喜びを分かち合う
（筆者撮影）

３・「ムラでは」と「一人前」

ところが、紐帯で結びつけられている人のなかには、春駒をやったことのない人も当然います。本番に参加しない人も練習を一緒にやっていたこともあったようですが、今はその年に演じる人と門前春駒保存会の役員しか参加しません。それでは、春駒を演じることのできなかった人たちは、どのようにして一人前になるのでしょうか。

このような問いを門前の男性に投げかけると、様々な反応がありますが、大方次のような答えが返ってきます。「春駒か消防団をやって一人前」だと。この瞬間、俚諺は再構築されているといえるでしょう。筆者と住民の間に起きた会話、たったの一往復でも、ことわざは文脈に適応しようとしているのです。ですが、これが俚諺として確立するには、一往復で消滅することなく、俚諺が語るものを原則として認めている集団から、一定の賛同を得なければなりません。また俚諺だけではなく、一人前の定義も社会の変動とともに移り変わっています。

少し下世話な話をすれば、春駒の練習は男女の出会いの場となっていた側面もありました。かつての村落生活では、配偶者をもって一人前という傾向が強かったことは事実です。今年で 31 才となる筆者には良い人がおりません。周囲の友人も独身が圧倒的に多いです。四年制の大学を出て、就職することが常識化しつつある都市圏の生活に於いては、20 代で結婚するのはなかなか難しいものがあります。しかし調査へ赴く度に、村の長老格からは、「いつまでもフラフラしていないで身を固めろ」「はやく一人前になれ」と、心配あるいは叱咤されてしまいます。彼らの発言が意味するところは、複合的に存在する諸要件を満たしていなければ、川場村の生活に於いては一人前と認められてこなかったというものです。仕事や結婚だけでなく、その要件の一つに春駒があるのです。観察している限りでは、結婚は個人の自由であるというように風向きが変わって来たように思えますが、実際のところはまだわかりません。

筆者が川場村に通い始めてから四年ほど経過しました。村落の社会構造が、度合いとして静的な地域では、その内部に飛び込めるかどうかが、最初の関門となります。田舎出身

の方ならば、実感いただけることと思いますが、平日の昼間から村内を一人の見知らぬ男が徘徊しているのは、不審極まりないことです。ある村で春駒の調査を行っていた時、私を名指しで記してある回覧板が村内で回っていたことを、小学校の生徒から教わり、とてもびっくりした経験があります。

今では、川場村の生活にだいぶ馴染んできたのだと勝手に思っています。春駒のことを聞きに行ったのに、一日中コンニャク芋の談義を聞かされたり、ブルーベリーに関する知識の研修という名の手伝いをしたり、こんなことは日常茶飯事です。一人で寂しく冷飯を食べることもなく、村を離れていても音信が届くようになりました。民俗を研究するものとしては、恵まれた関係を築いていると思います。そのおかげで、従来の研究では詳らかになっていなかった点も、明らかにすることができました。

少々話がそれてしまいましたが、それなりにムラの生活にも馴染んでいる私でも、調査の際に越えられない一線があります。それを示すのもまた、「春駒をやって一人前」という俚諺なのです。この俚諺が意味するのは、「春駒をやらなければ、ムラでは一人前と認められない」という門前地区の原則であることは、先に述べた通りです。この「ムラでは」という言葉、すなわち俚諺が生きる文脈となるムラの生活を理解するのが如何に難しいかは、多くの研究者が指摘するところです。

かつて、群馬テレビの男性アナウンサーが、取材の一環としてムスメの格好をしたことがあるそうです。私も、オッカア役の着付けを体験させて頂きましたが、おそらく川場村へ調査で訪れた人間のなかでははじめてでしょう。ただ、可能なのはここまで、女装を体験するまでです。本番に外部の人間が参加することは許されていません。飽く迄も春駒はムラの行事なのです。行政村としての川場村や檀那寺である吉祥寺の意向もあり、対外的には「川場村の春駒」という体裁をとっています。これも難しい問題ですが、兎にも角にも、「春駒は門前のもの」という強い意識が門前地区の住民に共通していることは疑う余地がありません。この意識が薄れたとき、俚諺は活力を失い、形だけを留めた「ことわざの記録」のようなものになってしまうのでしょう。

４・俚諺が意味する理想的状態

この四年間、毎年春駒の練習が始める時期には村を訪れ、練習の最初から本番の後日まで密着した年もありました。踊りも踊れますし、長大な唄も全て覚えています。「これだけ来てくれているんだから、ムスメを体験させてやりたい」「役員の家で踊るときならダメかな」と言ってくれる保存会員の方もいらっしゃいますが、それでもムスメあるいはオッカア役をやることは叶いません。これ以上知りたいのなら、「門前に住んで所帯を持て」と、笑いの種となっているのが現状です。

ここだけの話ですが、オットウは最近、こっそりと体験をさせてもらうようになりました。これは、他の二役とオットウの役割が根本的に異なることだけでなく、本来のオットウが歓待に耐えきれず、潰れてしまうという理由もあります。年によっては、午前中にオットウが交代することもあるほど、冬場に一日中酌を受け続けるのは厳しいものがあります。村の生活に於いて、お酒は単なる嗜好品を越えて、重要な意味を持ちます。なにも、「宴会の本来の義とは云々」などと、大風呂敷を広げるつもりはありません。ただ経験則として、お酒を断るよりも、お酒で粗相をした方が、まだ印象が良い気がします。この付

き合いも、試練の一つと捉える人も多いようで、先輩が熱の入った指導をしている光景をよく目にします。指導の力の入れようは、祭礼時に振舞われる御神酒で毎回潰れていた私が、御猪口 10 杯程度まで飲めるようになったことから、察して頂きたいと思います。

お酒の話題が出たついでに言えば、平時の調査で訪れた際にも、酒の席を設けて頂くことがしばしばあります。酒の席の利点は、一時的に俚諺が示す壁が希薄化することにあると思います。春駒当日など、何らかの行事の日だと、非日常的な空気が後押しして尚更です。これにはメリットがあります。何故なら、少なくともその時は、ムラの皆さんが私にもつ、「春駒を調査しにきた外からのお客様」という認識が薄れているからです。デメリットといえば、重要だと感じた話をしっかりと記録したつもりでも、翌日ノートを見るとミミズしかおらず、朝から憂鬱になることがあるぐらいです。その席では、とても興味深い話や刺激的な出来事を聞くこともできますが、残念ながら文書として公表することはできません。しかし、どうしても紹介したい話だけ、怒られることを覚悟して、最後に触れておこうと思います。あるとき、ひどく酩酊した門前の男性から次のようなお叱りをうけたことがあります。

> 外のもん、こいつみたいに頭がいいやつは語彙があるからさ。十割増しで綺麗に書くけど。いいかぁ。村のもんの本音はさぁ、上が春駒やれ、消防団やれっていったら、下のもんはやる。これが村の生き方ってもんだ。これがやってるものの本音！

いかがでしょうか。ことわざを含む民俗は、相互作用によって形作られている側面があることを、明快に示した発言といえませんか。それと同時に、「ムラでは」という壁が如何に堅固なものか、痛感した一言でもあります。ことわざは、相互作用に生息する生物のようなものだと私は考えています。春駒を実際に体験した者、体験できなかった者、見る側にまわる者、そして地区外の人間、様々な人々の交流が生みだし続けるムラのあるべき姿、一種の理想的状態、それがこの俚諺の指すところなのです。

参考文献

板橋春夫「養蚕と春駒―群馬県利根郡川場村門前の春駒―」『まつり 70 号』まつり同好会 2008 年
板橋春夫「養蚕と民俗芸能」『群馬県の歴史文化遺産―近現代・養蚕文化―調査報告書』　群馬歴史文化遺産発掘・活用・発信実行委員会 2015 年
阪本英一『養蠶の神々―蚕神信仰の民俗―』群馬県文化事業振興会　2008 年
西川桂史「定着した春駒と地域社会―群馬県川場村門前地区の「春駒」が担う役割―」『群馬歴史民俗 36 号』　群馬歴史民俗研究会　2015 年
西川桂史「養蚕業から分離した養蚕民俗」『利根川文化研究 39 号』利根川文化研究会　2015 年

第５章　衣食足らずとも

蓮見 順子

「いくつものネパール」

その朝早く、私は友達のチャリの家へ急ぎました。一年余り肝臓を患っていたチャリの兄さんが、昨日から危篤状態にあることを知っていたからです。ようやく辿りついた私の足を止めたのは、家の入口に逆さに置かれた一束の藁でした。それはこの家に不幸が起きた事のしるしでした。

家の中は妙に静かで、女性たちの忍び泣きの声がルルルルル、ルルルルルと コオロギの歌の様にきこえていました。チャリの部屋のドアをそっと開けるとチャリは一人しょんぼりとベッドの隅に坐っていました。私は駆けよって肩を抱き、かける言葉もなく二人で泣きました。「ああラーマよ、ああ神さま！」というチャリのお母さんの嘆きの声が私の耳に入ったのは、それからしばらく経ってからでした。私が部屋に入っていくと、お母さんは両手を拡げて私を抱きとめ、堰を切った様に声を上げて泣きました。私も涙があふれて止まりませんでした。母親の様子を気遣ってでしょう、その時チャリの姉さんが部屋に入って来ました。自分の母親と私が抱き合って泣いている姿を見て、一瞬おどろいた様子でしたが、でも黙って部屋を出て行きました。

私はその時、昨晩の光景を思い出しました。ベッドに横たわり、苦しそうに荒い息をつくチャリの兄さんを、身内の方たちが固唾を飲んで見守っています。その時チャリの姉さんが突然叫びはじめたのです。「すぐに注射を打たなきゃ！ドクターはどうしたの！どうしてこないの！」 弟が助からない事を直感したに違いありません。私は思わず姉さんのそばにより、背中をなでていました。錯乱状態にあった姉さんは一瞬私に気附き、身内でもない私を拒否するように立ち上って部屋を出て行きました。

チャリの兄さんはまだ四十才の若さでした。夕方、遺体が荼毘に付されている間、私は姉さんの部屋にいました。そしてもう大分前から、姉さんは同じ言葉を繰り返していました。「かまわないから、あなたは外で食事をしていらっしゃい」。私も又、同じ言葉を返していました。「でも、私は何も食べたくありません」。ネパールでは遺体を焼きそれに続く儀式が終了するまで、身内の者は食べ物を口にしてはならないのです。「本当に強情な人だ」と姉さんはつぶやきました。でもそこに非難のひびきがないことは、私にもわかりました。

葬式の日から何週間かたち、亡くなった弟の後を継ごうと区長に立候補したチャリの姉さんは、悲しむ暇もなく、選挙運動であわただしい毎日を送っていました。投票日の朝、私がチャリの家の勝手場に坐っていると、きれいなサリーに身を包んだ姉さんが入ってきました。区長選の勝利を願う儀式が僧侶の手で簡単に行われ、姉さんの額に赤いティカがつけられました。それから姉さんは、儀式のために皿に置かれたゆで卵を手に取ると、一口齧り、私の口元に持ってきました。私が齧ると次はチャリ、残った小片を姉さんは自分の口に納めました。

ネパールでは、人が少しでも口にした物を自分の口に入れるのは、穢れた行為として拒否する慣習があります。進歩的な家庭では、もうあまり厳しくは守られてはいない場合もある様ですが、身内でもない、しかも外国人の口に触れた物を食べるということは、それ迄の私の経験では考えられないことでした。ひとつの玉子が異国人の私にもまわってきたこと、そしてその玉子がネパールの友人の口に入ったことの意味を、私は今でも大切に思っています。

人は、それぞれ違った立場で、異なった状況のもとにネパールと出会い、ネパールの人々と接触します。その立場・目的が政府、企業からの派遣であれ、研究、調査であれ、あるいは登山、観光であれ、つきつめて行くと結局は人と人とのふれ合いになります。そしてそこには知識や情報では得られない、経験や理解が生れます。よく異文化理解の難しさが云われます。私は異文化の中で、文化を越えて人と人、心と心のふれ合いの豊さを肌で感じました。

この文章は二十年あまり前、私が編集委員をしていたある会の会報に掲載されたものです。この記事を書くにあたっては背景がありました。その会報で、ネパールでODA（政府開発援助）の仕事に携わる企業の方々に、仕事を通じての経験を紹介してもらうというシリーズを企画したのです。ネパールは、国連の定める世界最貧国の一つとして、また、開発のかなり遅れた途上の国として、日本から様々な支援を受けていました。そのODAの仕事で、ネパールに七年あまり滞在し帰国した企業マンが、こんなことを書いてきたのです。現地でどのような仕事に携わったかを述べ、最後に「よく、ネパールをどう思いますか？ネパールは好きですか？と質問される事がありますが、私は“ネパール国にネパール人がいなければ国としては最高です”と答えます」。

編集委員会はこの一文を読んで頭を抱えました。依頼原稿で、没にするのは難しい。しかし、日本とネパールの友好親善をテーマとしているこの会が、「ネパール国にネパール人がいなければ最高です」などと書かれた記事を掲載するわけにはいきません。国に人がいなければそれはもう国ではなく、単なる土地です。この方はネパール人を否定し、同時にネパールを国としても否定しているわけです。確かに文化の違う土地で仕事をするのは大変なことです。色々やりにくいこともあったと想像出来ます。ネパールの人との仕事のやりにくさは沢山の方々から聞いて知っています。のんびりした国で、ゆっくりやる。働き口も少ない貧しい国だから、仕事を長引かせたい。時間や契約をしっかり守るなどという認識は乏しい。書類はあちこちに回されて、政府からの許可がなかなか下りないなど、きちんと計画に沿って事を進めることに慣れている日本人たちは、いらいらさせられてしまいます。でもそこはやはり文化の違い、相手の立場も考えながら仕事を進めていかなければなりません。編集委員会はこの方に原稿を送り返し、理由を述べて修正をお願いしました。原稿は、肝腎の部分はほとんどもとのまま戻ってきました。「自分の本当の気持ちだ、変えられない」ということでした。結局原稿は、大きな変更もなく掲載を余儀なくされました。かろうじて編集委員会がとれた対策が、上記「いくつものネパール」を次号に掲載するということでした。

ODAの仕事をされている方々がすべてこの方のように、相手国に強い不満、厳しい批判を持って帰国されているわけではありません。この「企業シリーズ」でも、仕事を通じて、あるいは仕事を離れても沢山のネパールの人々と交流を持ち、ネパール大好き人間になって、帰国後もプライベートに、たびたびネパールを訪問している方の報告もありました。

よく被支援国によるODA批判で聞くのは、相手国を支援しているという形をとりながら、ダム、道路、病院などの建設等で、結局、日本の建設会社がそのプロジェクトを請け負い儲けているんだ、という思いです。そういうことをネパールの人たちも十分承知しています。もしこの方の心の底に「おまえたちのためにやってやっているんだ」という気持があり、それが態度に表れていたとすれば、感謝するどころか逆に反発を招くこともあるわけです。

この企業マンは“「衣食足りて礼節を知る」と云う諺の意味を肌で感じた。日本国憲法が保証している文化的最低生活を、国民の大多数が出来る様になって始めて、モラル、国民の義務、個人主義等につき、ネパールで話す価値が出て来ると云う状況に依然としてある“とも述べていました。「衣食足りて礼節を知る」。食べるもの着るものが十分に足りて初めて礼儀作法に思いがいく。ネパールにも意味を同じくすることわざがあります。「二口食べて神を思い、亡き人を思う」。ネパールの人たちは神を敬い大切にします。亡くなった人の回忌の法要も忘れません。そのような人たちでも、まず腹を満たさねばそこまで思いが至らない、とことわざは語っています。

さらにこの方は、日本国憲法が保証している文化的最低生活の基準を、世界中の人々に当てはめて意見を述べているようです。そして、それが満足されない国の人々はモラル、国民の義務、個人主義等について話す価値もないと、切り捨てています。共に働くネパールの人たちが礼儀作法を知らないと感じて、よほど閉口したのでしょう。ネパールはたしかに貧しい。とても衣食が十分足りているとは言い難い状況にあります。ただ、この方の言う礼節とは、何を基準に計っているのでしょうか。日本は衣食足りてさらにあまりある国です。けれど日本人にも、礼儀をわきまえない人は数知れずいます。

文化の違いにより当然礼儀作法も違ってきます。例えばネパールの人は、あまり口に出して礼を言う習慣がない。贈り物を差し出すとはにかみながら、おずおずと手をだしますが何も言わずに受け取ります。ネパール語には、日本で普通に使われる「ありがとう」に相当する言葉が見当たらないのです。「ダンニャバード」という言葉がありますが、軽々には使われません。恐らく、心の中で礼を言っている。しかもそれは、相手にではなく神に対して言っているように思えます。ネパールの人たちの礼儀や挨拶は人から人に直接行われるのではなく、そこには神が介在しているのかもしれません。彼らは、感謝の気持、お詫びの気持を、かかわった当事者を媒介に、天上のもっと大きな存在に対して示す。極端に言えば人と人とのコミュニケーションが、神を通じて行われている。そんな気がします。ネパールの人々にとって、神は偉大であるがまた同時にとても身近で、親しみのある存在なのです。日本では神仏との付き合いがとかく改まったものになり、他人行儀になりがちですが、ネパールでは小さな贈り物、小さな友情。その一つ一つは神との会話、触れあいのきっかけ、なんとも心楽しいことです。

ネパールの国民性を示す、こんなことわざもあります。

「手の甲の美しさは手のひらにはない」

人に物をあげる時、手の甲を上にして渡します。そして、もらう時は手の平を上にします。ここには、人から物をもらうことに恥じらいとためらいがあるように思えます。逆に物をあげる行為を美しい行為と見ています。「どうぞというように、頂きますとは言えない」というネパールのことわざも、同じ気持を表しています。これらのことわざは、ネパールの人々の奥ゆかしさを示していると思いますが、同時に貧しい国が故の、分かち合う心の大切さをも示しているようにも思えます。さらにもう少し視点を変えて見ると、その根底には、ヒンドゥー国家であるネパールのカースト制度の影響がうかがえます。カースト制度は法的にはもう廃止されているものの、人々の生活の中には根強く残っています。特に最下位カーストの「ナチュネ」―不可触カーストは、常に上位カーストから物を受ける立場にあるため、控え目な態度をとることになります。逆にいうと、上位カーストの者は不浄とされるナチュネから、物を受け取らないといったカースト制度の掟が物の授受と

いう行為にも影を落しているように感じました。

このように国や民族は、それぞれの文化、習慣を持ちそれを基準に生活しています。理不尽で馴染めない習慣と思えることであっても、それを是正していく努力は必要かもしれませんが、その価値観を拒否し、あからさまに攻撃することがあってはならないと思うのです。

共にネパールと深い関わりを持つ編集委員会の面々は、この出来事を通じて自分たち自身の行いを振り返り、衣食足りてあまりある国の人間としての奢りはないか、知らず知らずのうちにネパールの人々が不快に思う態度をとっているのではないか、改めて考える機会を与えられました。

第６章　髑髏の思惑

福井 栄一

「人の美醜は顔の皮一枚。髑髏になれば同じこと」とは、お芝居でよく耳にするセリフ。

確かに、容姿についてはそうかも知れないが、生前の信心の差は、死後、髑髏になったときに現れる。

平安初期の説話集『日本霊異記』下巻には、こんな話が載る。

孝謙天皇の御代のこと。僧某は、紀伊国牟婁郡熊野村の永興禅師に師事して修行に励んでいた。

一年ほど経つと、某は、

「山を越えて伊勢国へ行きたい」

との想いを募らせ、永興に暇乞いをした。

永興は快諾し、餞別の品をたくさん持たせようとしたが、某が水入れと麻縄二十尋（ひろ）だけを受け取って、旅立って行った。

それから、約二年が過ぎた。

熊野村の村人たちが、舟の用材を伐り出しに山へ入ると、きまって何処からか法華経を誦（ず）する声が聞こえる。

何か月もそれが続くので、村人たちは、

「よほど尊い僧が修行なされているのだろう。一度、お姿を拝したいものだ」

と思い、周囲を捜すのだが、それらしい人影はなかった。

さて、半年後。

所用で再び山中へ分け入った者が、またしても例の読経の声を耳にした。

驚いて辺りを捜すと、岩場で投身自殺をした男の遺骸が見つかった。両足を麻縄で縛って身を投げたらしいその男は、かたわらにあった水入れから、かつて永興のもとにいた某だと判った。

さらに、三年後。

木こりが山へ入ると、また読経の声がする。知らせを受けた永興が駆けつけると、なんと髑髏が経を誦していた。舌だけが腐らずに法華経を詠じていたのだという。

この説話は本来、法華経の功徳を称揚する目的で『日本霊異記』に採録されたのだろうが、古びた髑髏の口中で、赤い舌がうねうねと蠢きのたうつイメージは、鮮烈。信心の尊さ云々の次元を超えて、猟奇的ですらある。

他方、海の向こうの中国には、こんな髑髏の話が伝わる。

清朝末期の考証学者・兪樾（ゆえつ）の手になる『右台仙館筆記（うたいせんかんひっき）』に載る話である。

ある日、ひとりの男が草原に転がる髑髏を見つけた。哀れに思った男は、地面に穴を掘り、髑髏を丁重に埋めてやると、

「今日は我ながら善いことをした」

と悦に入って帰宅した。

ところが、その夜から男は寝込んでしまい、高熱にうなされ続けた。

男の枕元に、例の髑髏の亡霊が現れて言うには、

「俺はいままで、広く風通しのよい草原で、機嫌よく、気ままに暮らしていたのだ。それなのにお前は、この俺を無理矢理、暗い窮屈な穴へ押し込めやがって、どういう料簡だ。思い知らせてやる！」

看病していた家族はこれを聞いて驚き、供物を捧げて髑髏の慰撫に努めた。

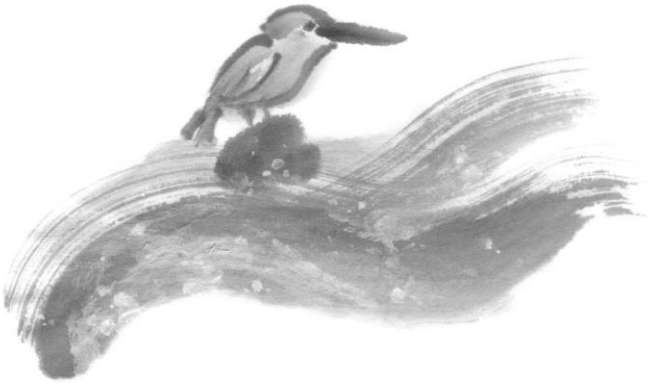
すると、その甲斐あってか、十日ほどで男は本復した。

「小さな親切、大きなお世話」とばかりに男を逆恨みし、わざわざ枕元までやって来て、憎まれ口をたたいたくらいだから、この髑髏の口中にも、舌が立派に残っていたのだろう。

有難い経を誦するのも舌、恩人を難詰するのも舌。

顔の皮と違って舌は、「髑髏になれば同じこと」とはいかないようだ。

（完）



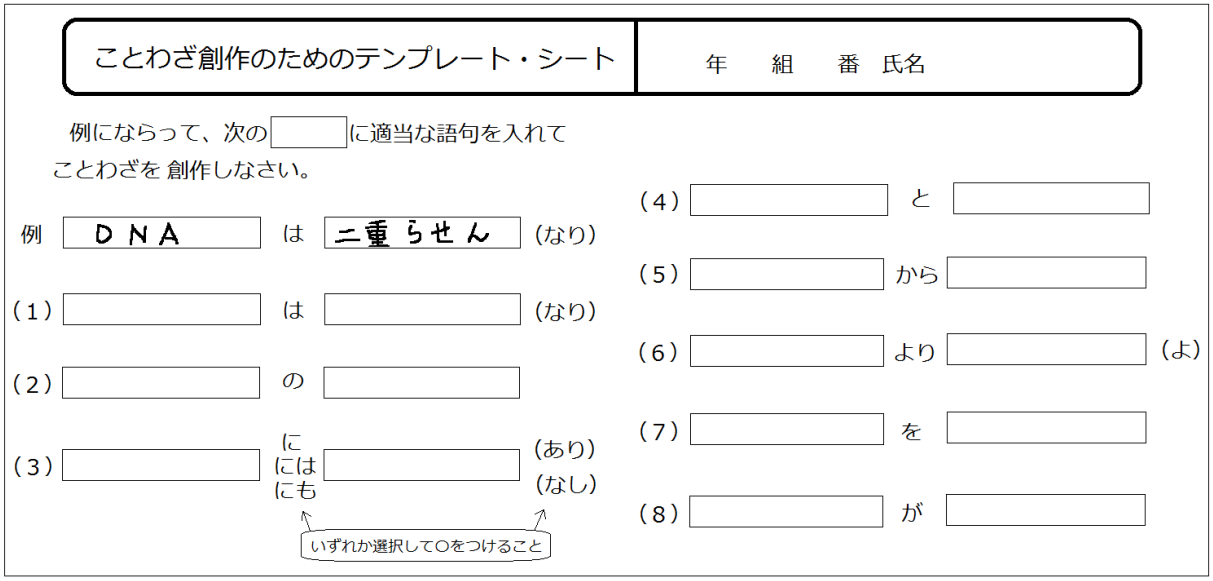
第２部　ことわざコラム

第１章　教室でことわざを創作するためのテンプレート・シート

浅賀 宏昭

ことわざは、夥しい数の言葉が口ずさまれ、その中からほんの少しだけが共感され、伝承されたものでしょう。私たちが創作する場合も、多人数で長い時間をかけられるなら、特別な指導なしに多数の興味深い作品ができるはずです。しかし、このような放任主義的な方法は、人数と時間に限りがある教室での実施には向きません。学習効果につながるような作品が、適切な指導なしに効率よく生まれることは稀なことだからです。

既存のことわざは、文としては短く、リズムが良く、覚えやすいなどの条件を備えています。従って、ことわざの型を教えて、それを真似て作るように助言するのが、効果的であるはずです。このように考え、私は、短めの文より成ることわざを選び、それらの型を分析し、その結果をもとに作成した「テンプレート・シート」（下図）を配付して指導を試みたところ、実際に良好な結果を得ているので、ここに紹介します。



これを使えば、ことわざらしい言葉を誰でも容易に創作できます。例として、私の大学における「生命科学」の講義における教育実践から生まれた作品を紹介しておきます。

(1)「遺伝子は DNA なり」、「生食（生理食塩水）は 0.9%」
(2)「高齢女性の骨粗鬆症」、「男女別の養毛剤」
(3)「運動に分岐鎖アミノ酸」、「ウイルスに抗生物質」
(4)「セルロースとペクチン」、「カロテンとキサントフィル」
(5)「DNA から RNA」、「RNA からタンパク質」
(6)「飽和脂肪酸より不飽和脂肪酸」、「インスリンより運動」
(7)「塩基配列を読む」、「繰り返し配列を調べる」
(8)「チミンがウラシル」、「ATP が生命エネルギー」

これらの意味についての解説はここでは割愛しますが、このシートを配布して宿題にもできるなど、使い勝手がよいので、紹介させていただこうと思いました。

第２章　鬼の目にも涙のこと

蟻川　剛

「みんなは、『鬼の目にも涙』ということわざを知ってるかい。」
「知ってる、知ってる。『泣いた赤鬼』のことでしょ。」
「この前に習ったお話でしょ。赤鬼が泣いて、涙を流したもの。」
「ああ、そう、そう。」
と、つい子どもたちの反応のよさに同意の言葉を発してしまいましたが、後悔することになりました。

この時は、道徳の時間で「泣いた赤鬼」を資料として取り上げたばかりでした。そのことを子どもたちがすぐに思い出したのでした。

「泣いた赤鬼」は、童話としても名高い作品で、道徳の資料としても長い間使われてきています。国語や道徳で取り上げられる作品は、たくさんの子どもたちがいっしょに学ぶので、多くの子どもの共通のものとして幅広く知られることとなります。

この話は、人間と仲良しになりたいと思い続けていた赤鬼が、なかなかその願いがかなわずに悩んでいたところ、友達の青鬼がそれを知り、わざと人間に乱暴しているところに赤鬼が助けに入るという計画を立て、それが成功しました。人間と仲良くなるという念願がかなった赤鬼が、青鬼のところへひそかにお礼に行くと、置き手紙をした青鬼は、旅立った後でした。そこで、赤鬼が青鬼の置き手紙を読んで、涙を流して泣くという話です。

道徳で取り上げた「泣いた赤鬼」という資料で学ぶのは、「友情」です。青鬼が、友達のために人間に乱暴をして赤鬼にこらしめられるという芝居をしたのです。赤鬼は、青鬼のその行為を通して「友情」に気づき、「友情」のために涙を流したのです。それが、赤鬼の目の涙でした。

しかし、ことわざの「鬼の目にも涙」となると、そのような友情という範囲だけには留まりません。もっと大きな慈悲の心から生まれる涙です。とても涙を見せることなど考えられない鬼が見せる涙です。その落差から、とても大きな慈悲の心が働いたものだと思いました。そして、「泣いた赤鬼」という子どもたちの心に響く名作ですが、その作品からの子どもたちのイメージに同意したのは、少し早まってしまったと後で思いました。

ことわざは、深い意味を持つものが少なくありません。安易な例を上げてことわざの真の意味から外れてしまっては、何にもなりません。ことわざの意味については、正しく知っておきたいと思いました。

第３章　孫は来て嬉しい、帰って嬉しい。

石原 仁誌

学会本『笑いとことわざ』の拙著の部分でも触れていますが、私は昭和 58 年に広島県の呉市で某生命保険会社の営業所長を拝命しました。大学を卒業してその会社に入社し 6 年目、27 歳の折です。当時、その会社の広島支社には 19 の営業所がありましたが、私は最年少の営業所長でした。私を入れて総勢 19 名の営業所でしたが 20 代は私と事務員、残りの 17 名は生命保険の外交員で、母親と同年齢の 50 代の者も 3 名、60 歳を過ぎた者も 5 名いて、全員が私より目上の人間でした。当時呉市は人口 23 万人の地方都市にしては大きな街でした。ご存知の方も多いと思いますが、戦前は旧日本海軍の呉鎮守府が置かれ、また戦艦大和を建造した呉海軍工廠も置かれていました。その当時から海軍エリートや建艦技術者の転出入が多く、軍艦にきれいな水を供給するための浄水場の設置、それに伴う水道の普及、そして海軍に納める、また軍艦に積み込むための日本酒の製造、艦艇に使用する精密機器の製造、電気やガスの整備を始め、明治の終わり頃には既に市電も街中を走っていて、その当時は全国有数の繁華な都会を形成していたそうです。

私が赴任した昭和 58 年はその当時の面影はさほど感じませんでしたが、他所からの流入者にあまり干渉しない、いい意味での無関心を装うといった気風は引き継がれていたようで、転勤者の私には住心地良い 3 年間の勤務だったと記憶しています。が、それはあくまで呉の街の話で、生保の仕事に精通していた彼女たちと私の関係はそんなドライな関係でなく、自分たちの息子と同じ年代の私のことを、また新婚真っ只中の家内も、そして呉で生まれた長男も、家族ぐるみで仕事を超えて暖かく接してくれました。私自身の地方勤務は広島、呉通算の 6 年間だけで、その後は東京での生活が続きましたが、彼女たちとはずっと交流を続けておりました。私自身がその会社に 38 年間勤めて定年を迎えた今となってはさすがに彼女たちも大半が還らぬ人たちになってしまっていますが。

その彼女たちと営業所内やお客様のところへ伺う道すがら、仕事の事だけでなくいろいろな話をしました。全員が私より人生の先輩。素直な気持ちで彼女たちの話に耳を傾けることが出来ました。広島弁は耳にされる機会も多いかもしれませんが、呉弁となるとあまり耳にされた方も多くはないと思います。東映の「仁義なき戦い」の主人公を演じた菅原文太が喋っていたアレです。呉弁で彼女たちはよくことわざを会話の中に挿入していました。私も当時からことわざに関心がありましたので、違和感なく彼女たちとの会話を楽しみました。会話はお決まりの「所、長さん」(所と長にそれぞれアクセントあり)という呼びかけから始まりますが、このイントネーションを紙面で再現出来ないのはすごく残念です。「若いぶに(時)の苦労はこ(買)うてでも、しんちゃい」「そんなん言わんの」(言わぬが花)「元の帝国」(彼女たちの創作ことわざ→名刺を出す際に戦前は帝国生命という名前でしたと説明)等々。そんな彼女たちは呉以外の所にいる孫が多かったのか、皆一様に「孫は来て嬉しい、帰って嬉しい」を連発していました。孫が来ることを嬉しそうに私に報告し、無事戻って行ったことを安堵の表情で話してくれたのが印象的でした。

現在、我が家では孫とは無縁です。息子たちに良き伴侶が早く見つかってほしいと願うばかりですが、彼らが時折自宅に帰ってくると聞けば何やら嬉しくなり、長居をして帰って行くとホッとするのも当時の彼女たちの思いに通じるところがあるのでしょうか。

第４章　目からうろこ　コンタクト

大田 朋子

私は強度といって言い位の近視です。どのくらい近視かというと、視力検査表の一番上さえよく見えないくらいです。裸眼検査の際は、厚紙に印刷されたランドラルト環（C の字）のでっかい一文字を検査人（たいてい看護師か助手）が両手に持って、私が見える位置、「右！」だの「左！」だの「上！」やら「下！」やらと答えられる位置までクルクルクルクル回しながら「まだ見えぬか？」と言わんばかりに近づいてくるほどです。

と書いても、恐らく視力の良い方には何のことやら判らないと思いますので、知り合いの近視の方に聞いてくださいませ。裸眼視力 0.1 台の人なら、喜んで教えてくださるはずです。

さて、そんな私にとって当然コンタクトレンズはもはや体の一部です。春先のアレルギーの眼のカユカユやゴロゴロ感にもめげず、うたた寝や原稿執筆徹夜にもめげず、コンタクトを長年愛用しております。おまけに眼鏡では視力の矯正と見た目にモンダイあるため、コンタクトなしの生活などもはや想像すらできません。

コンタクトを両目からポロッとはずす時こそ、最もプライベートでリラックスできる至福のひと時。

今日一日を無事終え、後は寝るだけお休みなさい！の時、締め切り間際の原稿を書き終わった時、仲間と楽しい酒宴を終えた時などのコンタクトポロリの瞬間は、まさに「じょんのび、じょんのび」（新潟のことばで、ゆっくり、らっくりの心身用語）で「目からうろこ」とはこの感触だ！と常々思っております。

ちなみに、周りのコンタクト愛用者に聞きまわったところ大いに賛同を得た次第であり、いっそう「目からうろこ」感を薄くて小さなレンズをはずすたびに感じております。

朝から晩まで、両目に張り付いて私の知覚情報をサポートしてくれたコンタクトに、またうろこを纏って酸欠状態で不自由な思いをさせていた両目に感謝してこのことわざを捧げます。「目からうろこ　コンタクト」！

第５章　「７年越しの昔の恋人」「備えあれば憂いなし」

ー東京マラソン参戦記—

清水 泰生

東京マラソン 2010 年に走って以来、参加するための抽選に外れてばかりで、走れなかったが、ようやく抽選に当たり走ることが決まった。「7 年越しに昔の恋人」に会うような気がした。11 月のアテネマラソンでまずまずのタイムで走り、秋もそれなりに練習が積めて、体重もベストに近い状態。3 時間 10 分前半、うまくピーキングをあわせることができればサブ 3 は狙えるという感触はつかんだ。

2 月初めオックスフォード、バルセロナに行くことになり、東京マラソン前の最後の走り込みはできるかどうかと思ったが山口政信氏の「練習は時としてうそをつく」というマラソン創作ことわざと「走るのだけがマラソンではない」ことを思い出し、体調に合わせて練習、最後の調整をしようと思った。

そして、2 月初めヨーロッパへ。ヨーロッパ学術旅行の終わりに差しかかったバルセロナハーフマラソン。当日とても疲れていてバルセロナハーフマラソンは 1 時間 33 分台だった。2 週間後の東京マラソンで、中間点 1 時間 30 分を切って通過できるかなと思った。しかし、「火事場のバカ力」と「信じるものは救われる」と思い、自分の力を信じて、帰国後、調整に入った。帰国後、日を追うごとに調子が上がってきて、かなりやれるのではと思った。ただ気になったのは、東京マラソンのスタート位置は C ブロックだったことだった。C ブロックだったら、スタート地点まで相当時間がかかると思った。そして、レース本番。やはり思った通りスタート地点まで 1 分 30 秒かかった。10 キロまで、渋滞で思った通り走れない。仕方がないので 28 キロ付近からスピードを上げようと思った。中間点は 1 時間 30 分強（ネットタイムでは 1 時間 28 分 50 秒）、勝負は 25 キロ以降のペースアップだと思った。28 キロ付近に差し掛かりペースアップをしようとしたとき右のふくらはぎが 2 度けいれんを起こした。この時、サブ 3 は無理だと思い、残り 15 キロ足らずをどのように着地すれば、けいれんをおこらずに走りきれるかを考えながら走った。28 キロ以降、ペースダウンをしたが 2010 年の東京マラソンとあまり変わらずのタイム（ネットタイム 3 時間 13 分前半）で走り抜けた。何とか目標であるボストンマラソン参加資格タイムや大阪マラソンのアスリート枠などを取った。サブ 3 は達成しなかったが一応合格点であった。ただ、（「備えあれば患いなし」で）ハイソックスで走ったら、ふくらはぎを冷やさずに、けいれんしなかったかもしれない。次回の大会までにハイソックスで練習をして、それがフィットしていたら、大会当日ハイソックスで走りたいと思う。

第６章　祖母にもらった福

藤村 美織

子供のとき、祖父母の家によく出かけました。何かにつけて大勢で集まり、楽しい食卓を囲んだことが、昨日のように鮮やかに蘇ってきます。私は、両親のどちらの側でも初孫でしたので、今、思い返せば、とても可愛がられたことは間違いありません。

私自身のなかで、ことわざのルーツを探ってみると、いくつもが、あの頃の食卓の周辺に行き着き、特に母方の祖母の声として聞こえてきます。母は五人きょうだいの四番目で、私が物心ついたとき、隠田（おんでん）に住む祖父母の家に皆で集まるといえば、いとこ六名で遊べる大イベントを意味しました。

子供たちはじっとしていることなく、動き回り、笑い、泣き、怒り、また笑いと、にぎやかでした。けんかをすれば、祖母が間に入ってきて、何やら口にしたものです。

「ほらほら、負けるが勝ち」、「あらまあ、勝って兜の緒を締めよ」、「どっちもどっち、喧嘩両成敗」、そして、あっという間に仲直りしました。日本語がまだ覚束ないうちから、耳にしていたと思います。

誰かが転んで、泣き叫べば、また祖母が飛んできました。

「あら、弁慶の泣き所ね。ちちんぷいぷい、ごよ（御代）のおんたから（御宝）のおぷぷのぶ、痛いの痛いの飛んでけ～。ほーら、今、鳴いたカラスがもう笑った！」

その祖母じたい、よく笑う人で、祖父から「笑い上戸」と言われていました。

あるとき、「近所にルンペンがうろうろしている」と大人がいうのを私たちは耳にしました。玄関の前で遊んでいると、それらしき人が、目の前の通りに現れたことがありました。「ルンペーン！」と皆で呼びかけて、手を振りました。振り返してもらったかどうか、定かではありません。でも、それを祖母に報告したら、びっくりされたか、よい反応を得られず、どうやらその呼びかけは、よくないらしいと子供なりに悟った覚えがあります。この言葉がドイツ語で、「ぼろ布、ならず者、浮浪者」を意味すると知ったのは、ずっと後のことでした。

食事の時間は、大きなちゃぶ台を皆で囲みました。柱時計の音が印象的でした。「茶柱が立つと縁起がよい」と教えてくれたのは祖母だったのでしょう。お茶碗に、自分で茶柱をみつけたときの劇的な瞬間が、今でも、ちゃぶ台とともに胸に刻まれています。

あの頃は、畳に座っていたので、食後、そのままひっくり返って、ごろごろすれば、「食べてすぐ横になると牛になる」と戒められました。やがて、畳のある家に住まなくなったので、牛に変身するイメージは記憶の彼方に消えかけています。

食卓で忘れられないのが、「残り物に福がある」ということわざです。大皿で、何か一つ残ったとき、その言葉とともに、祖母が私のお皿に取り分けてくれました。それは、物心つかない頃から始まり、かなり大きくなっても繰り返されました。今となっては、ほほえましい思い出です。この話を伝えたら、「えこひいき！」と笑い飛ばした人がいましたが、他の子供たちも、もらっていたに違いありません。いずれにしても、私は、祖母から福をたくさん受けとって、今でもその福を抱えているような気がします。

第７章　一寸先は闇

三木 恒治

長野善光寺は、宗派を問わず万民が参詣する寺として知られている。ここは「牛にひかれて善光寺参り」ということわざとともに、本堂の地下の暗がりを周回する「戒壇巡り」で有名だ。先日「日本ことわざ文化学会」の懇親会で、この戒壇巡りが話題となった。観光客の中には闇にすっぽりと包みこまれてパニックに陥り、逆戻りする者すらいるという。

われわれ現代人は明るさに慣れて、暗闇の感覚をなくしてしまった。私たちが技術の進化にともない獲得したものは数限りないが、失ったものも枚挙にいとまがない。「闇の深さ」もその一つであろう。昼夜を問わず街はさまざまな灯りに彩られ、私たちの生活は夜の闇とは無縁に等しい。しかし外国に行くと、大都会の繁華街を除いて光の渦に包みこまれているという感覚はなかなか味わえない。ドイツの街を夜歩いても、公共の施設や住宅の階段などでは人が通過した後は自然と照明が落ちる場合が多い。(これは彼らが合理的で節約家であるというより、東洋人と瞳の構造が違い、強い光に耐えられないことが背景にあるようだ)

暗闇談議が盛り上がったとき、ふと３・１１の東日本大震災の折、停電で暗闇に覆われた一関の街を悄然として彷徨った記憶が甦った。6 年前東北大震災の折、たまたま岩手県を旅しており、電車の中で運命の時を迎えた。4 時間近く車内に閉じ込められた後、夜になってようやく車外に出ることができた。最後尾の車両から線路に降り、足元がおぼつかない中、最寄りの踏切まで 200 メートルほど歩き、JR が用意したタクシーに乗り込み一関に向かった。厄介なことに比喩的な意味だけでなく、物理的にも「一寸先は闇」なのである。停電のため信号はもちろん、人家も灯りがともっていない。当然のことながら、車はゆっくりとしか進まない。一関駅前についたときは 9 時を回っており、自家発電で辛うじて灯りがともっているコンビニに足を運ぶが、ほとんど品切れ状態。その時始めて事態の由々しさを実感させられた。と同時に不安と焦燥で文字通り目の前が真っ暗になった。暗闇に包まれた巷を手探りするように歩を進め、ようやくホテルにたどり着き無理やり中へ入れてもらう。暗がりのロビーでは、生気を失い憔悴しきった多数の「先客」が身を横たえていた。これが四日間の避難所生活の始まりであったが、自然の摂理を前にした人間の卑小さを痛感させられた。そして、日常の中で築き上げてきたものが、こうした実存的状況にあっては何の役にも立たないことを嫌というほど思い知らされた。一方、この体験で初めて人とつながる素養（これが真の意味での人間力であろう）の重要性を認識できたような気がする。脱力感と絶望の中にあっても人は前を向いて歩を進めなければならない。非情だが、それが生活のメカニズムというものであるし、だからこそ社会の絆が重要な意味を持ってくるのである。

ヘッセの詩『霧の中』で、「本当の暗闇を知らないものは賢くないのだ」という一節がある。ドイツの森は鬱蒼としており、霧が下りると視界が遮られ一寸先も見えなくなる。時に人は暗闇の中に身を置いてみないと、孤独、引いては他者とつながって生きる意味というものを理解できないのかもしれない。文明の光の恩恵を当たり前と考えている私たちは、それが失われたとき不条理な違和感に襲われる。私たちは科学の進歩と時代の変化の中で、いつしか自然への畏敬を失っていった。時には私たちがそこから生まれ出たであろう原初

の「暗闇」に思いを馳せ、自身の無力さを悟り、限界を謙虚に見つめることも大切だ。「戒壇巡り」は、そうした原点に立ち帰る契機を私たちに与えてくれるようである。暗闇から見えてくる光明ほどありがたいものはない。そこから新たな日常が見えてくることだろう。

第８章　座右の銘

芳川 雅美

「**座右の銘**」とは、故事にもとづく諺や四字熟語または先人たちが残した名言（箴言）の中から、本人自身が自らへの戒めとして常に心にかけている言葉、というほどの意味だと思います。有名人はインタビュー等で聴かれると待ってましたとばかりに答えますが、私たちは即答できるほどの「傾倒する名言」を日頃から意識しているでしょうか？

大学時代に合唱をやっていて、50 年以上たった今でも OB 合唱団で歌っています。我々の大学は関東にあり、必然的に OB 合唱団の構成メンバーも関東出身者・在住者中心。その中でいわば関西支部みたいな存在の 10 数人のメンバーで練習している私たちは、本番のときだけ東京へ出かけ、合計 100 人ぐらいで関東の仲間と一緒にステージに立ちます。
この「関西支部員」一同が、座右の銘のごとく心に留めている言葉があります。

「**練習は不可能を可能にす**」

…この言葉を残された小泉信三という方は、現在の天皇陛下が皇太子殿下としてあったご幼少のころ教育係を勤められ、陛下の人格形成に最も影響を与えた人物とされています。慶應義塾の塾長などを歴任される一方、日本のスポーツ界（特に野球の普及）に貢献されるなど、昭和日本の文武両道を牽引された偉人の一人でした。察するに前掲の言葉はスポーツにおける練習を念頭においていたと思われますが、合唱など文化的な活動にも十分当てはまるものでした。難しい曲が度重なる練習を通じて磨き上げられてゆく過程を我々も幾度となく体験し、そのつど達成感や充実感を味わい感動したものでした。関西メンバーの当時のリーダーが紹介したこの言葉、私は初め言葉の説得力は理解しつつも、あの「**継続は力なり**」など有名な諺の展開項目のような位置づけではないか、と見ていました。

その私の見かたを一変させるような出来事が起こったのです。

数年前に関西で、ライバル早稲田グリークラブ OB との演奏会が持たれました。当然関西メンバーが中心となるが、やはり最小限度の声量と表現力を確保するには関東メンバーの「助っ人」が不可欠で、結局両校とも関西の日頃の練習時の二倍ほどの人数になりました。我々のメインステージはブラームス作曲「運命の歌」。美しく穏やかな天上の世界と醜く凄惨な地上の人間界を対比的に歌い上げたこの大曲はドイツ語のうえ難易度が高く、本番に至る練習は指揮者・ピアニスト・合唱団員一丸となっての濃密なものでした。

演奏会の当日、私は地域で関っている知的障害者支援 NPO のメンバー数人をヘルパーとともに客席に呼びました。メインステージは難解だが他にもポピュラーな歌があるし、日頃めったに聴けない合唱音楽を新鮮な気持で聴いてもらえればいい、という程度の動機からでした。演奏会の翌日、NPO の作業所へ出勤した私は、昨日来てくれた子たちに礼を云い、感想を聞きました。…大半の子が「難しくて判らなかった」と答える中で一人、Y ちゃんという子だけが「わかったよ。良かった」と云ったのです。「でも Y ちゃん、言葉が判らなかったろう？どんな歌だった？」彼女は迷わず答えました。「天国と地獄の歌や」…私は、少しの驚きと、こみあげてくる熱いものを感じました。彼女の簡潔な言葉は、見事にこの曲の本質を云い当てていました。あの難解なブラームスの曲の本質を、知的障害者の子供にも伝えることが出来た！…我々のあの「一丸となっての猛練習」が生み出した「気

魄」がステージから客席に伝わり、Y ちゃんを含む聴衆の心に響いたのでしょう。

「**練習は不可能を可能にす**」それ以来、この言葉の重みが増したような気がしました。我々「関西支部員」は、それまで以上に実感を持ってこの言葉を「座右の銘」に戴くようになっていたのです。

【執筆者紹介】
① 氏名（担当章）
② 出生年、③ 出身地、④ 所属

① 浅賀 宏昭（第２部／第１章）
② 1963 年、③ 東京都出身
④ 明治大学教授（商学部／大学院教養デザイン研究科）・理学博士

① 穴田 義孝（第１部／第１章）
② 1946 年、③ 東京都文京区出身
④ 明治大学名誉教授、政治学博士（社会心理学）
NPO 法人郷土のことわざネットワーク・ことネット理事長

① 蟻川 剛（第２部／第２章）
② 1950 年、③ 東京都出身
④ 公立小学校時間講師、元東京都小学校教諭

① 石原 仁誌（第２部／第３章）
② 1955 年、③ 岡山県出身
④ 朝日生命保険相互会社 代理店業務管理部 募集管理担当部長
日本ことわざ文化学会 理事

① 大田 朋子（第２部／第４章）
② ③ 新潟市出身
④ NPO 法人郷土のことわざネットワーク・ことネット理事
新潟郷土史学会会員、心理学・日本語講師

① 古後 靖弘（第１部／第２章）
② 1939 年、③ 大分県出身
④ ことわざメル友会

① 佐古 恵里香（第１部／第３章）
② 1983 年、③ 愛媛県出身
④ 清風情報工科学院日本語科非常勤講師

① 清水 泰生（第２部／第５章）
② 1965 年、③ 和歌山県出身
④ 同志社大学日本語日本文化教育センター嘱託講師
清風情報工科学院日本語講師養成講座講師

① 西川 桂史（第１部／第４章）
② 1986 年、③ 愛知県出身
④ 明治大学情報コミュニケーション研究科博士後期課程
日本民俗学会、群馬歴史民俗研究会、新潟県民俗学会会員
NPO 法人郷土のことわざネットワーク・ことネット社員

① 福井 栄一（第１部／第６章）
② 1966 年、③ 大阪府出身
④ 上方文化評論家、四條畷学園大学 看護学部 客員教授

① 藤村 美織（第２部／第６章）
② 1958 年、③ 東京都出身
④ フリーランス翻訳（ドイツ語）

① 蓮見 順子（第１部／第５章）
② ③ 東京都出身
④ ネパール研究者

① 三木 恒治（第２部／第７章）
② 1956 年、③ 岡山市出身
④ 岡山理科大学教授
日本独文学会中国四国支部編集長

① 芳川 雅美（第２部／第８章）
② 1941 年、③ 東京都出身
④ 慶應義塾大学卒、会社勤務 38 年
川西市の知的障害者支援 NPO 活動に従事
合唱を生涯の趣味とする

日本ことわざ文化学会

ホームページ　https://www.kotowaza-bunka.org/

『コトワザあらかると』

2017 年 11 月 1 日　第 1 版第 1 刷発行

発行者:日本ことわざ文化学会©
「日本ことわざ文化学会」事務局
所在地:〒700-0005 岡山市北区理大町 1-1
岡山理科大学教養教育センター　三木研究室
学科 HP：https://www.kotowaza-bunka.org/
E-mail：paremio@gmail.com
Fax 番号：03-5840-7976